

---

# 便器でGO！

五十歩百太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

便器でGO！

### 【Nコード】

N4591K

### 【作者名】

五十歩百太郎

### 【あらすじ】

食事中に読むことはあまりおすすめしません。

ある日の午後、弁座博士は近所に住む二人の兄弟を自分の研究所に呼びつけた。

「やあ、よく来たね。二人とも」

赤髪の少年と青髪の少年は、不思議そうな顔をして博士の顔を見つめていた。

「あのー、博士。なぜ僕たちが呼ばれたんですか？」

赤髪の少年が質問した。

「それはだね、大器くん」

「どうせ、また変な発明を俺たちに試させようとしてんだろ」

青髪の少年が不機嫌そうな表情を浮かべて、博士の話に割って入った。

「ははっ、小器くん、それは違うよ。今日は君たちが、例の大会で優勝できるようにスーパーマシンを作ったんだ」

「それで何だっつて博士が得するんだよ」

「フッフ、実は君たちには私の開発したスーパーマシンの広告塔になってもらおうと思っつてね」

「広告塔？」

兄弟は顔を見合わせた。

「その通り！君たちが優勝すれば、間違いなく私の開発したマシンは量産の目処がたち、市販化までこぎ着けるだろう。そうすれば私は……いや、この研究所は大金持ちだ！フハハハハ」

兄弟はきよんとしたまま博士の顔を見つめ、深いため息をついた。

あれから数週間が過ぎた。

天井がぼつかりと開いた東京ドームほどの大きさのドームでは、

便器四駆の大会が開催されていた。会場は超満員で、観客の声援が地鳴りのように響いていた。空には小さな花火が打ち上げられ、まるでお祭りのようだった。

「ほわー、すげなこりゃ。ちよつと俺、緊張してきたぜアニキ」  
会場の中心に足を踏み入れた小器は、周りを見渡してため息混じりにそう言った。しかし、大器からの返事はなく、不思議に思った小器は大器の方を振り向いた。

すると、大器の手足はブルブルと震えていて、顔にはびっしょりと汗をかいていた。小器は思わず吹き出してしまった。いつもなら吹き出したりするものなら即刻うるさいと大器は怒鳴るはずなのに、小器が吹き出してもなお何の反応も示さなかった。大器は、それくらい緊張していたのだ。

博士が白衣のポケットに手を突っ込みながら、興奮したように「広告のしがいがある」などと発言して、ニヤニヤしながら兄弟の傍にやってきた。

「あつ、博士！ アニキが緊張して固まってるんだ」

「それなら大丈夫だよ」

そう言つて、博士はポケットから白い錠剤を取り出した。

「このアドレナリン剤を飲ませれば、興奮して緊張が解けるんだ」

博士はもう片方のポケットから天然水の入った試験管を取りだし、無理やり大器の口の中に水と錠剤を押し込んで飲みこませた。

「サア！ いよいよ便器四駆大会の開幕だア！」

突然、場内に髭もじゃ仙人のような便器ファイターの声が響き渡った。

「おつ、いよいよ開幕だな……」

黒いTシャツを着た大柄な小学生が呟いた。

「お前ら、この大会はレースじゃねえ。バトルだ。わかるな？」

「へい、黒器さん！ わかってますぜ。へへ」

「この大会で一暴れしてやりますぜ……」

黒器の手下たちが悪そうな口ぶり、ニヤニヤしながら拳を手のひらに押し当てたり、口を開けてガムをくっちゃくつちやと噛んだりしていた。

便器ファイターが、ドームのど真ん中に設立された舞台上で色々説明している頃、大器はアドレナリン剤の作用により急激に興奮しつつあった。

「さあ！ 行こう、小器！ 僕たちの便器魂をこの大勢の人たちに見てもらおうんだ！」

大器は早速ズボンを脱ぎ、目の中に炎をたぎらせてフルチンでピットにダッシュしていった。

それを見に見かねた小器が、

「アニキー、まだズボンははいておいてくれよー。俺が恥ずかしいじゃねえかよお」

と顔を真っ赤にして、脱ぎちらかされたズボンとブリーフを手に取り、大器を追いかけていった。

それを見た博士は大爆笑してお腹を押さえながら転げ回った。

「サア！ では諸君！ いよいよレースを開始する！」

便器ファイターのおっさんくさい声が、高らかに響き渡る。すると会場中に地鳴りのような歓声が沸き上がった。彼もまんざらではないようで、マイクが天に突き抜けるが如く勢いよくマイクを突き上げた。

これを聞いた小器は、大器にズボンを履けと催促するのをやめた。そして自分もズボンとブリーフを脱ぎ、フルチンでピットゾーンに置かれてあるマシンに足を向けた。

マシンは、洋式と和式の二種類に大別される。洋式にはウォッシュレットタイプと通常タイプが存在し、ウォッシュレットタイプは水の刺激により便の出具合を促す効果があるためやや有利であった。マシンには便器の土台となる部分に小型の車輪が四輪着いており、その土台部分には色々な装置が詰め込まれていた。主に、小便や大便をエネルギーに変換しモーターに電力を供給するシステムである。

電池やバッテリーの類を搭載することはルール違反でなのだ。

兄弟は、博士の作った洋式型ウオシユレットタイプ便器『ニツク』と『マグナ』に座り、両脇に備え付けられている鉄の棒を下ろして、その先端に付けられているハンドルを握った。

「じゃあ行くか、小器！」

「ああ！ 絶対優勝するぜ、アニキ」

そう言った兄弟は、腹筋に力を入れて気張った。

ブリブリブリ……

汚物を閔知したセンサーがそれを水で流し、エネルギー変換システムによって電力が発生した。

先に大器がアクセルペダルをちよんと踏み込んだ。すると、静かに『ニツク』が動き始めた。

それに続いて小器もアクセルをちよんと踏み込み、スタートラインに向かった。

「サア、それではさっさとスタートするぞお」

便器ファイターは、鼻くそをほじくりながら力の抜けるような声で言った。

「スリー、ツー、ワン、スタート！」

便器ファイターのかげ声と共に、信号が青になった。

参加者約30名がアクセルペダルを踏み込み、勢いよくスタートしていく。スタートラインから100メートル先での時速はなんと、20キロメートルにも達していたとかいかなかったとか。

「うおおお！ どけどけえ！ ぶつちぎりだあ」

小器が吠える。大器もそれに負けじと吠える。

「じゃまだじゃまだあ！ どけどけえ！」

ブリブリブリ……

「ああ！？」

鋭い眼光が兄弟に向けられた。それも複数。黒いティーシャツをきた黒器軍団である。進路を塞ぐように広がり、妨害行為を働いていたのだった。

「やいやい、お前ら邪魔すんな！　ここはお前らだけの道じゃねえぞ」

黒器はニヤリとほくそ笑んだ。

「おい、お前ら……」

そのかけ声と共に、兄弟は軍団に囲まれた。

それを見ていた便器ファイターがすぐさま実況する。

「あああつと！　大器君、小器君がチーム黒器に囲まれたあああ！」

「くっ……」

「おい、お前ら何の真似だ」

「俺らにたてついた罰だ。お前らを潰す！」

黒器軍団の和式便器の土台の側面から、ノコギリのようなローラーが姿を現す。するとそれが高速回転しだし、ローラーの間から汚物が勢いよく発射された。

「ぐあつ！　やめろ、汚いぞお前ら！」

「うるせえ！　俺らにたてついたお前らが悪いんだ」「くっそお……」

…

ブリブリブリ……

「今の攻撃が仇となつたな……」

大器が呟いた。

「見る！　今の攻撃でうまいことお前らの汚物が僕たちの便器に入つたぞ」

「アクセル全開でぶつちぎりだぜ！」

ブリブリブリ……

「しまったあ！」

兄弟はアクセルを全開にして、断トツぶつちぎりドームを一周してゴールした。

「やったぜアニキ！　俺たちワンツーフィニッシュだぜ！」

「僕が二位なのは納得できない！　小器、お前今夜覚えてるよ」

地鳴りのような歓声に、お互いの声は聞こえていなかった。

全員がゴールした後、便器ファイターは早口及び事務的な声でこう言った。

「このレース中、チーム黒器が不正を働いたため九十年の出場停止処分と致します。尚、今後ともより一層の運営向上を目指していきますので、何卒よろしくお願い申し上げます」

黒器は、それを聞いて絶望した。

「リーダー……百歳になっても生きていたらまた出れますって」

そう言っつて、団員が黒器を慰めようとした。

「うるさい！ 九十年後ついたらこんな遊び、とっくに廃れてるだろうが！」

「そつっすね……」

九十年後。

「サア！ みんな準備はいいか！」

「おう！ ゲホツゲホツ」 便器四駆のスタートラインには、黒器とその他大勢の子どもが並んでいた。

「もう、あの兄弟にあの時の屈辱を返せないのは残念じゃが、今一度この大会にリベンジしてやるわい」

「レディ！ ゴー！」

ブリブリブリ……

黒器は飛び出した。あの頃の気持ちのまま。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4591k/>

---

便器でGO！

2010年10月8日15時22分発行